

冬季スプレーギク栽培における植物成長調整剤ビーナインの処理濃度と効果

～ 処理濃度が高くなるに伴い切り花および花首の伸長抑制程度が増加 ～

1. はじめに

冬季作のスプレーギクでは、切り花のボリューム不足による品質の低下が問題になっている。キクにおいて植物成長調整剤（ビーナイン顆粒水溶剤、以下ビーナイン）は、花首や節間の伸長抑制による品質向上を目的に用いられているが、その処理濃度など、使用基準の幅が広く、明確な使用方法が定まっていない。ここでは、植物成長調整剤の処理濃度が切り花品質に及ぼす影響について検討した。

2. 材料および方法

材料は、‘ガルーダ’、‘セイヒラリー’および‘セイプリンス’を供試した。2020年11月5日に床幅90cmのベッドに直挿しし、15cm×15cmの枠に2株ずつの6条植えとした。無摘心栽培とし、日最低夜温が15℃以上となるように加温した。電球色蛍光灯を用い、暗期中断（22:00～2:00）を定植時から12月17日まで行い、その後は自然日長で管理した。ビーナインは、処理濃度①4000倍区、②2000倍区、③1000倍区および④500倍区を設置し、消灯10日後と消灯30日後に100L/10a散布した。また、対照として無処理区を設けた。

3. 結果

発蕾日はいずれの品種でも、ビーナインの濃度による差がほとんどみられなかったが、開花日は‘セイプリンス’の500倍区で2～3日遅くなった（データ省略）。

切り花長および頂花の花首長は、いずれの品種でも処理濃度が高くなるに伴い伸長抑制効果が大きく、特に、500倍区で切り花長が短くなる傾向がみられた（図1）。

切り花長別の割合に対するビーナインの処理濃度による影響は品種によって異なり、‘ガルーダ’では1000倍区まで濃くしても、

最も長い出荷規格である80cm以上の割合が100%を維持し（図2）、80cmに調整した重さは、1000倍区で最も重かった（データ省略）。‘セイヒラリー’および‘セイプリンス’では濃度が高くなるに伴い、80cm以上の割合が減少する傾向がみられ、‘セイプリンス’の500倍区では、60cm未満の切り花もみられた。

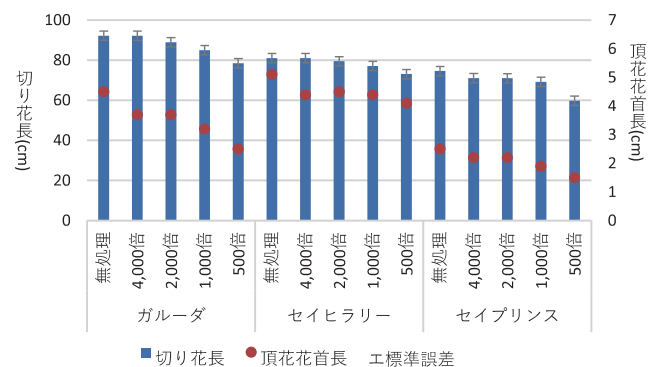


図1 ビーナインの処理濃度が切り花長および頂花花首長に及ぼす影響

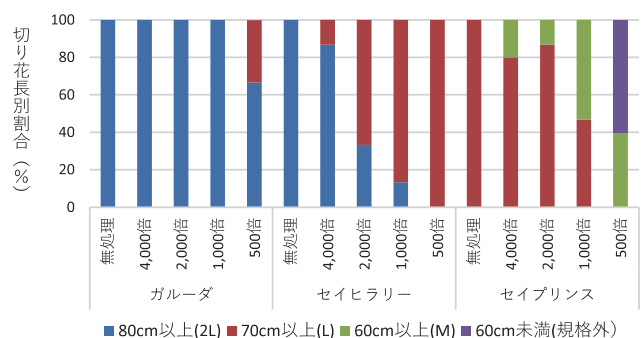


図2 ビーナイン処理濃度による切り花長別割合への影響

4. おわりに

ビーナインの処理では、切り花長、頂花の花首長に対して処理濃度の影響が大きく、いずれの品種においても処理濃度が高いほど伸長が抑制される傾向が認められた。今後は、新規光源を利用した電照栽培下での植物成長調整剤の効果的な使用方法について調査する予定である。（栽培部 宮本芳城）